

フルサンタ・ジャケット

かまたり

亡国の山奥にあるというサンタクロースの里。来るべきクリスマスに備えて、数多くのサンタクロースはその準備に忙殺されていた。

「日本行きプレゼントはそっちの山だ！」

「そっちは検疫済みのだから混ぜるんじゃない！」

「新入り！ 領収書の書き方何度言ったらわかるんだ！」

「まずはアジア向けのを優先して梱包だ！ アメリカ向けは最後でいいからな！」

殺気に満ちた雰囲気ではあるが、そこで働くサンタクロース達の目はどこか生き生きとしているようであった。前年のクリスマスから一年弱、念入りに準備を重ねてきた大舞台が目の前に迫ってきているのだから無理もない。世界中の子ども達に笑顔を届けたい。彼らはその思いを胸に準備にいそしんでいるのだ。

しかし、その光景とは裏腹に神妙な面持ちで集まっ

ているのは各支部の代表たちだった。プレゼントの梱包作業を行っているサンタクロース達とは別に、各代表は緊急の議題があると長老に急遽呼び出されたのだ。

「では、南アフリカ代表例の物を」

司会役に促されて、南アフリカ代表はおもむろに一枚の文書ファイルをプロジェクターに投影した。

「これは、今朝アメリカから送られてきたものです」

その文書についていたタイトルは『A国テロ撲滅作戦——自由の翼作戦——実施に伴う関係各所への通達』

「アメリカはこのたび、アフリカのA国をテロ組織支援国と認定し海兵隊を中心とする米軍による急襲作戦を計画しました。作戦予定は現地時間十二月二十四午後八時から四十八時間。二日間でA国内のテロ支援グループを掃討する計画のようです」

「またアメリカの独断専行か。普通、こういうのはもつと早めに通達が来るものだろう」

口を挟んだのは中東代表だ。過去に何度も、米軍の作戦行動にプレゼント配送を妨害された経験があるた

めアメリカへの印象は最悪だ。

「どうやら、急遽立案された作戦のようです。今頃安  
保理にも通達されているところでしよう。アメリカとし  
ては、政府からクリスマスに景気のいい話を発表した  
いというところでしょうか」

「ま、アメリカのそういうところは慣れてるがな。  
それで、何が問題なんだ」

「それが……」

南アフリカ代表は少し言葉を濁しながらも続けた。

「アメリカは、作戦行動中A国への一切の入国を禁止  
しました。陸路も海路も、空路も全てです」

「なんだって!？」

会議場はひっくり返りそうな大騒動となった。

「それじゃあ、A国の子どもへはプレゼントを届けら  
れないということか!？」

「我々サンタクロースの存在意義そのものを否定する  
なんて横暴だ! 断固抗議すべきだ!」

「アメリカの言うことなんて気にするな。我々は我々  
の仕事をするべきだ!」

「だが、我々が米軍にたてつけるのか……」

ある代表の一言で会議は静まり返ってしまった。米  
軍がどれほど強力な軍事を保有しているのか、少な  
くともただのサンタクロースが太刀打ちできるかどう  
か、それがわからぬ愚か者はこの会議の場にはいな  
った。

「昨年は米軍とひと悶着ありましたし、これ以上あま  
り事を構えるのは得策ではないかと……なによりアメ  
リカの子どもにもプレゼントを届けるわけですから」

「そうですね……アメリカとは協力関係にあった方が  
いい。今回、A国は見送らざるを得ないと思います」

「非常に悔しいですが……仕方のないことかもしれま  
せん」

会議の流れがA国見送り已む無しの方向で決まりか  
けた。しかし、そこで初めて会議の中心的存在である  
サンタクロース長老が口を開いた。

「我々サンタクロースの理念はなんだ」

再び、一様に皆が押し黙る。長老の声に促されて赤  
い帽子の髭面連中は、それぞれに彼らが若かったころ

を思い出しているのだ。小難しいことは考えず、ただクリスマス朝にプレゼントを発見し喜ぶ子ども達を想像していた。その笑顔を糧に、サンタクロースはクリスマスイブの夜を飛び回るのだ。そこには人種も宗教も国境も難解な国際環境もない。ただ純粋に笑顔のみを求めていく。

「我々サンタクロースの存在意義は、プレゼントを届けることではない。子ども達に笑顔を届けることだ。それは一国の迷惑によって妨害される程度の小さな理念なのか？ 君達はその程度の思いでこれまでの人生をかなぐり捨ててサンタクロースとしての人生を歩み始めたのだろうか」

自然と、赤い帽子の頭たちが上を向いていく。

「……やろう」

「ああ、やろう。A国の子どもに、笑顔を届けるために」

サンタクロースの心はここに一つになった。彼らもつとも大切にされる理念、笑顔のための団結だ。

「しかし、我々はサンタ憲章で自衛のための最低限度

の武力以上の保有を禁じられています。海千山千の米軍を相手にするには、明らかな力不足です」

最たる当事者である南アフリカ代表の冷静な意見が、熱気に若干の水を注ぐ。紛争地帯でのプレゼント配送に備え、サンタはある程度の銃火器を保有しているもののそれはあくまで自衛用であり、火力で圧倒している米軍の相手になるものではない。

「知恵を使うのだ。クリスマスイブまでまだ二週間以上ある。それまでに、A国に無事プレゼントを配送するための策を我々で考えるのだ」

長老を中心に、今サンタクロースの心は一つになった。

※※

「俺が訓練教官を務めるサンタクロースである！ これより貴様らウジ虫どもは俺をサンタと崇め、崇拜する。俺は神だ！ 貴様らの神だ！」

南アフリカ支部に属する二十名ほどのサンタクロー

スを一列に整列させ、一人のサンタクロースが歩きながら櫛を飛ばして回る。

「サンタなのか神なのかはつきりしろよ……」

列の中の一人から思わずという風に声が漏れる。

「今言葉を発したのはどのウジ虫だ！」

教官サンタはつかつかとそのサンタと目の前に近付き、そのサンタを見上げた。

愚痴を洩らしたそのサンタは身長二メートル超でプロレスラー顔負けの巨軀を誇り、教官サンタを威圧するように半歩前に出て彼を見下ろした。

しかし、教官サンタの鋭い眼光はまったく揺らがない。

「最近のウジ虫は言葉を話すのか、私の知識が古かったか」

「なんなんだあんたは。今年サンタになったばかりの新入りの癖に偉そうに講釈垂れやがって。俺たちは誰もあんたを教官とも神とも認めない。覚えはない。とつとと失せガフツ」

突然二メートルの巨体が腰を中心に半分に折れ、次

の瞬間には跪いてその場に倒れ伏した。思わず残りのサンタが一斉に目を向けると、正拳突き姿勢を取った教官サンタのみがそこに立っていた。

「まだ何か言葉を発するか」

「ひゅー……ひゅー……」

「やはりウジ虫は喋らんか」

空気が凍りつくとはこのことだろうか。あの巨漢サンタが一撃で倒されたというのは、巨漢サンタを普段からよく知るその他のサンタにとってそれほどの衝撃だった。

「他に言葉を話す奇行種はいるか？ 貴様らがただのウジ虫だということを脳味噌に直接刻み込んでやる！」

もはや教官サンタにたてつこうとする者はいなかった。寒空の下、皆が一樣に冷や汗を流しながら教官サンタの次の言葉を待っている。

「よろしい、なぜ俺が貴様らウジ虫の上に立っているのか説明してやろう。貴様らは二週間後、A国の地で世界最強の米軍と渡り合えねばならん。だがウジ虫では米軍に勝てん！ 今でこそ人であることをやめてこ

の赤い服を着ているが、俺は昨年まで米軍に所属していた。だから断言できる！

貴様らウジ虫を米軍と渡り合えるよう鍛えあげるために、長老から俺が直々に依頼されたのだ！俺が貴様らに米軍に対処する方法を全て叩きこんでやる！

どうだ、楽しいか!？」

教官サンタは一人のサンタの前で立ち止まり、ぐつと顔を近づけた。

「楽しいか新兵！」

新兵と呼ばれた小柄なサンタは一層縮こまってしまい、目すら合わせることができない。

「言葉も忘れたのか虫けらめ！」

さつき喋るなって言ったよな。

全てのサンタが心の中で思ったが、決して言葉に出すことはない。出すことが出来ない。

「どうした！なんとか言わんか！」

「はい……楽しいです……」

「俺はイエスカノーで聞いた！それが貴様の答えか！」

「イ……エス」

「上官にはサーをつけんかチビ！」

「……サーイエスサー」

「聞こえんぞふざけるなチビ！なんと叫んだか！」

「サーイエツサー！」

「あそこと同じように声も縮こまったのかチビ！」

「サーイエツサー!!」

「多少はマシな虫けらになったなチビ！だが貴様の顔は見るに堪えん。ひどい顔だ！」

「サーイエツサー!!」

チビサンタの顔は涙が流れるたびにそれが氷点下以下の外気で凍りつき、ひどいものとなっていた。

「貴様ら俺の訓練を終えたときマシーンとなる。戦場にプレゼントを届けるマシーンだ。その日までは虫けらだ！」

教官サンタは素早く全員を見渡すと、さらに続ける。

「貴様らは俺を憎む！だがそれだけ成長する。俺は貴様らを差別せん。巨漢もハゲもチビも全て平等に価値がない！俺の使命は役立たずの虫けらを駆逐する

ことだ。子どもに愛されるサンタクロースに巣くう害虫をだ」

「ただいまより訓練を開始する！ ついてこられなくなつた者は遠慮なく申告しろ。腑抜けになつた虫けらはアメリカ人にフ〇〇クされるしか能がない。この俺が直々にトナカイの糞と一緒に堆肥として次の生を与えてやる。虫けらよりはよほど社会に貢献できるな」  
こうして、南アフリカ支部のサンタクロースにとつて地獄よりも厳しい二週間が始まつた。

※※

「本当によかつたのですか、長老」

事務仕事を片付ける長老サンタへ、側近であるメガネをかけたサンタが熱いコーヒーを持ってくる。

「訓練の様子を見てきましたが、あれは普通ではありません。あれがサンタクロースだと、私にはとうてい信じられません」

ペンを置き、湯気が上るコーヒーを一口すすつてか

ら長老は口を開いた。

「米軍を相手にしようというのだ。普通の神経を持つたままでは、どうにもならんよ。それに、あの教官サンタは確かに今年サンタの洗礼を受けたばかりの新人だが、子ども達に笑顔を届けたいという信念は本物だ。私は彼に賭けてみたくなつたのだよ」

「確かにやつの心意気は私も認めています。ですが、やつのことを快く思っていない者もまた少なくないのは事実です。噂では、昨年中東での騒ぎを起こした米軍の指導者だつたとか言われていますし」

「過去は過去、だ。我々はサンタクロースになる際、人であることをやめて子ども達のために生きていくと誓いを立てた。仮に彼が昔、サンタクロースといざこざを起こしていたとしても、今の彼には関係のないことだ。今の彼はサンタクロースの一人であつて、それ以上でもそれ以下でもない」

ちようど、長老とメガネのいる部屋の前を件のサンタクロース達を通りかかろうとしていた。彼はその手にそれぞれあてがわれた銃器を保持し、体力練成のた

めランニングをしているようだ。

生氣を失ったサンタクロース達の列の横では、教官サンタの怒号が途切れることなく続いている。

「とろとろ走るな馬鹿もの！ 貴様らは虫けらだ、ダニだ。いいか糞虫ども、俺の楽しみは貴様らが苦しむ顔を見ることだ」

「じじいのフ○○○みたいにヒイヒイ言いおって、みつともないと思わんのか！ ○○があるならこの場で○○○○○しろ！」

「笑うことも泣くことも俺が許さん。貴様らはプレゼントを届けるマシンだ。プレゼントを届けられなければ存在する価値がない！ 隠れて○○○かいているのがお似合いのお○○○豚になりたいか！」

「貴様らの女はその銃だけだ！ 尻のどかい○○○女など必要ない！ その銃を慈しみ、精一杯愛でてみる！」  
そのとき、限界を迎えたのか列の最後方を走っていたサンタクロースがどさりと倒れ込んだ。

「なんだ貴様、銃が汚れただろうがさっさと立たんか！」

「銃が重くて……限界です……」

「貴様の銃はたかが四キロに過ぎん。だがその巨漢は十八キロのロケット砲銃をかついで走っておる。銃が重いなどという戯言は貴様の○○○を切り飛ばしてから言え！」

「いいか貴様ら！ 戦場で頼れるのは仲間とその銃だけだ！ ○○○○している暇があれば、その銃を存分にしごいてやれ！」

長老の部屋の前を罵詈雑言の台風が通過したあと、長老とメガネの間には数秒の静寂が訪れた。

「……長老」

本当によろしいので？ と言外の質問を視線に乗せる。

「君の言いたいことはわかる。が、ここは私に預けてくれ。案がある」

クリスマスイブまであと、一週間。

※※

ついに、その日はやってきた。

十二月二十四日クリスマスイブの夜、米軍は海兵隊を中心として二個師団もの戦力がA国の土地に足を踏み入れた。

A国の軍備は脆弱であり、襲来する米軍を止める手立てなどあるはずもなかった。米軍はほとんど目立つた抵抗を受けないまま、A国の首都へと進撃していった。

そのほぼ同時刻、首都近くの山岳地帯には全身に赤い服を身にまとい、少々ぼさつとした白い髭を蓄えた男の集団がその時を待っていた。

皆その目は激しくギラついており、手には各々の得物を持った上で背中にはプレゼント入りの白い袋を背負っていた。彼らのギラついた目は、一様に教官サンタに向けられている。

「本日をもって貴様らは虫けらを卒業する。本日から貴様らはサンタクロースである。サンタの絆で結ばれる。貴様らがくたばるその日まで、どこにいようと貴様らはサンタクロースだ。」

二度と還らない者も出るだろう。だが肝に銘じておけ。サンタは死ぬ。サンタは死ぬために存在する。だがサンタは永遠である。つまり、貴様らは永遠である！  
そうして彼らは歩きます。ブーツでしっかりと地面を踏みしめ、二列縦隊で一歩一歩と。

「貴様らはサンタクロースを愛しているか！ 子どもたちを愛しているか！」

「殺せ！ 殺せ！ 殺せ！」

「俺達の商売はなんだ、サンタクロースの諸君！」

「殺しだ！ 殺しだ！ 殺しだ！」

「行くぞ諸君！」

「うおおお！」

※※

米軍に異変が起きたのは、日付が変わる直前のことだ。A国首都周辺に迫り、郊外の市街地に侵入した先行部隊が次々と交信を絶ったのだ。

最後に司令部へと入った通信はただ一言『赤いやつ



らが！』というもののみだった。

敵の特殊部隊か、はたまた大規模な反攻作戦が始まったのか。一切状況が不明となった米軍は、一旦その進撃の足を緩めた。同時に、ある部隊に出動命令が下る。

海兵隊武装偵察隊。威力偵察を主任務とする彼らが、消えた部隊の搜索及び敵地偵察の任務を帯び市街地周辺に降りたった。

そのフォースリーコンの小隊長を務めるガーハイム大尉は、市街地外の緩やかな丘からの偵察を開始するや否やききな臭さを嗅ぎ取った。

「静かすぎる。本当にここが中隊丸々消えちまった町なのか」

暗視装置越しに見える緑がかった視界には、別段変わった様子は一切見られなかった。すでに住民の避難は完了しているらしく一切の灯りは見えないが、加えて戦闘があったような痕跡も一切発見することができないのだ。

「車両の残骸も、炎も一切確認できない。無線は？」

隣に同じように伏せている通信兵は首を横に振るばかりだ。

「町に入った部隊に何度も呼びかけていますが、一切応答なしです。もはや全滅したとしか……」

「根拠もなく悲観的になるな。単に無線を失って、助けを待っているのかもしれない。行くしかないだろう」

「畜生、本当なら国で家族とクリスマスパーティーの予定だったのに、アフリカなんぞでクリスマスを迎えるはめになるなんて」

「ぼやくな。とっとと終わらせて帰るぞ。せめて家族に電話くらいはしてやらんとな」

言い終わると、ガーハイム大尉は部隊全員を近くに集めた。

「これより町に侵入する。一班はこのまま直線で移動。目抜き通りを直進。二班は右側面に回り込んで一班の援護だ。何が待っているかわからん。連絡を絶やすな」

全員が静かに頷くと、彼らが素早く移動を開始した。眼前に脅威が待ち構えていることは火を見るよりも明らかだが、彼ら海兵隊はその程度のことです。前進を躊躇

しない。切り込み部隊としての矜持が、彼らの足を前に進めていた。

「くそ。大尉、待ち伏せの気配がぶんぶんしますぜ」

ガーハイムとともに進んでいた部隊でもっとも古参の上級曹長がぼそりと呟いた。

「曹長は経験が？」

「はい、湾岸戦争ガルフ・ウオーのとき、イラクの片田舎で同じような嫌な気配を感じました。そのときは敵の待ち伏せにあい小隊長がやられました」

「その小隊長と、同じ轍は踏みたくないものだ。各自、警戒怠るな」

彼らは静かに、それでいて素早く市街へと侵入を果たした。目抜き通りの入り口で、一度足を止める。

「大尉、住民の避難は完全完了しているようです。人っ子一人の気配もありません。まるでゴーストタウンです」

曹長が物陰から頭だけ出し、暗視装置越しに周辺を確認する。普段は多くの商店が軒先を構えているであろう通りは、今やほとんどの建物がもぬけの殻だ。略

奪なども発生したらしく、店の商品がほとんど空の店舗も散見される。

「行方不明になった中隊の気配もなし、か。不気味だな」

ガーハイムは昨年まで派兵されていたアフガニスタンの町を思い出していた。米軍が通ったあとの町は、同じようなゴーストタウンとなっていたのだ。人が住まうことを前提としている空間に、当の人間が誰もいないというのは独特な雰囲気をもつ。よもやあの気味悪さを二度も体験することもなろうとは。

事態が起こったのはその時だった。なんの脈絡もなく、偵察を行っていた曹長がぱたりと倒れ伏したのだ。曹長を射抜いた弾丸の着弾から数秒後、遅れて銃声がガーハイムの耳に入る。間違いなく、長距離からの狙撃だ。

「曹長！ くそつ、敵だ。全員警戒！」

ガーハイムはその場に伏せて、曹長の体を物陰に引きずり込んだ。三十キロもの装備をつけた男一人を引きずるのはなかなか酷だが、見捨てるという選択肢は

ない。

「衛生兵！ 負傷者だ、こっちへ来い」

医療用バックを抱えた衛生兵が、同じように匍匐前進で素早くにやってきて、曹長の診断を開始する。幸い、命に別状はなさそうだという報告はすぐにやってきた。

「誰か、敵の姿を見たか？」

しかし、小隊の誰もが敵の姿を見でないという。

ここでガーハイムは確信する。敵のスナイパーは相当な手練だ。

「狙撃を避け、裏路地を進む。全員、建物の中を通れ」  
敵の正体がわかってしまえば、対策は立てやすい。

射角の広い大通りを進んでいたから狙撃の対象になったのなら、狭い裏路地を進んでしまえばいい。よしんば、そこに新たな待ち伏せがいたとしても道の狭さが今度はこちらの味方をする。一度に展開可能な人数が限られてしまえば、戦力差は気にしなくてよくなるというものだ。

ガーハイムは後ろに並ぶ部下がすぐに目の前の建物

に入り込んだのを確認すると、最後に建物に突入した。

「偵察隊隊長より二班、スナイパーがいる。場所、人数は不明。警戒せよ……二班？」

無線に吹き込んだ声に二班からの返事はなかった。

まさか、という最悪の事態が頭をよぎる。

「誰か、二班に連絡を！」

慌てて数名が同じように無線で呼びかけるが、やはり応答はない。

「いったい、何が起きている……」

シンと静まり返った一班に、今度こそ終わりを告げる音がやってくる。どこからか、カランという音とともに小型の物体が部隊のど真ん中に投げ込まれた。

「手榴弾！」

部下の一人がそう叫び対応姿勢を取ろうとしている様子は、ガーハイムの目にはスローモーション再生のように映った。

これが死か。

半径十五メートルを殺戮地帯に変える手榴弾から逃れる術など存在しない。建物へ避難したことすら畏だ

ったことを悟り、ガーハイムは己の不甲斐なさを悔いと同時に家族のことを思い出していた。

瞬間、閃光が思考の全てを奪い取った。彼ら海兵隊にとつて幸運があるとすれば、その手榴弾が殺傷を目的とした破砕型手榴弾ではなく制圧を目的とした音響手榴弾だったことだろう。

屋内で炸裂したことにより、耳をつんざくなどという生易しい表現では表せられない轟音が音速で隊員それぞれを貫いて、その衝撃に彼らは残らず昏倒するはめになった。

唯一、部下よりも意識を数秒長く保つことができたガーハイムは、横倒しになった視界の中、確かにそれを見た。

ブーツを履き、白いラインの入った服をまとった屈強な男。白い髭を蓄えたその男を、ガーハイムは確かに見覚えがあった。今頃は、故郷に残してきた娘が待ち望んでいるであろうその人物に間違いない。

「サンタクロー……」

言い終わることなく、ガーハイムの意識は闇の中に

沈んでいった。

※※

サンタクローズの作戦はこうだった。

すでに全住民の避難が完了した郊外の町に米軍をおびき出し、そこに全戦力を投入して足止めを行う。その隙に、首都を中心にプレゼント配達役を担うサンタクローズが本来の仕事を行うというものだ。

「守備隊よりプレゼント配達班へ、現状報告」

「は、教官どの。プレゼント配達は九割完了。あと三十分で終了予定です」

町の中心に位置する時計塔の上階に陣取る教官サンタは、配達班からの無線を聞き腕時計をちらりと見てから顔をしかめた。

「予定より遅いな。あと十分で終了予定だろう」

「は、トナカイがだいぶひーひー言っておりまして」

「どうせ今日以外は草を食うだけのやつらだ。遠慮せず鞭を入れる。急がないと明日の朝飯はバーベキュー

だと言い聞かせてな」

「了解、急ぎます」

無線を切ると、教官サンタは首にかけてある暗視双眼鏡を再び目にあてた。

「異常ないな、チビ」

「は、誰一人現れていません」

チビと呼ばれた小柄なサンタは狙撃用暗視スコープから目を離さないまま答えた。

今彼らは、町に侵入する米軍を狙撃して進行を遅らせる役目を果たしていた。先に侵入した先遣部隊を同じように制圧したことで、上手く偵察部隊も誘導することができた。

「お前の唯一の取り柄である射撃を活かせる機会だ。

敵が現れれば容赦なく撃て」

「サーイエッサー。容赦なくアメリカ人に弾をフ〇〇

〇としてやりませす」

彼らサンタクロース達が使用している弾丸は今日のためにこしらえられた特性麻酔弾だ。弾丸の針にゴリラでも数秒で眠りに落ちる強力な麻酔が塗布されてお

り、人間に命中すれば一瞬で昏倒させるだけの力がある。

米軍はサンタクロースの仕事妨害する敵ではあるが、彼らとて命令に従って実直に仕事をこなしているに過ぎない。そんな彼らを殺すのは忍びないという、サンタクロースのせめてもの情けだった。

「だが次はおそらくより強力な部隊が来るはずだ。後続の機甲部隊が町に到着すれば、俺達の装備では対処できん。それまでにプレゼント配達を終えなければ」

そう、サンタクロースの装備は基本的に自衛に必要な程度であり、戦車や戦闘機に対処できるほど強力な武装は持ち合わせていない。米軍が本気で攻撃に乗り出せば、ひとたまりもないことだろう。

「しかし、米軍が現れるであろう町を正確に予想するとは、長老もなかなかやる」

長老がどのように情報を仕入れてきたのかは定かではないが、A国で活動するサンタクロースにこの町で待ち伏せを行うように指示したのは長老自身だ。半信半疑で行動を開始したサンタクロースだが、もつとも

素早く住民の避難が完了し、理想的に待ち伏せが可能となった挙句米軍が実際に現れたとなれば、長老の見識に一目置いてしまうというものだ。

「は、おかげで少人数でも支障なく行動が可能となっています」

「そういうことだチビ、少しは頭を使えるようになったな」

そのとき、教官サンタの持つ無線が呼び出しを告げる音を発し、さっと無線のスイッチをオンにする。

「配達班より教官どの。トナカイが頑張ってくれました。プレゼントの配達をほぼ完了、これより所定の手順でこの国より脱出します」

「ほぼ、とはどういうことだ。正確に報告しろ」

「は、一つだけ宛先不明の小包がありまして。中身は医療用キットのようですがそれ以上の詳細不明」

「医療用キットとはまた変わった品だ。全ての子どもに配達したのだな？」

「間違いありません。首都にいる子どもで、この国は最後です」

「なら、良い子になかった子どもの分が紛れ込んでしまったのかもしれない。ともかく貴様らは撤収しろ。俺達もあとに続く。合流地点で会おう」

「間もなく米軍の主力が町に到達します、ご武運を」  
教官サンタは無線を切ると、今度は町に展開中の守備隊に無線を繋ぐ。

「全員へ告ぐ、仕事は完了した。俺達も脱出だ。不要な装備は破棄、徒歩でソリとの合流地点に行く。チビ、合流予定時刻は？」

「あと十五分です」

「聞いての通りだ。遅れたら懲罰だ、必ず間に合わせる。以上、交信終わり」

懲罰、という言葉に傍にいたチビの体が一瞬ぶると震える。すでに鋼以上の精神力を身に付けた彼らであるが、それでも地獄の二週間の記憶というのはそう簡単に捨てられるものではない。

「あ、待ってください教官、偵察から連絡が……偵察が数名のグループをこの町で発見したそうです。町外れの廃工場に潜んでいたようで、今まで発見できな

ったと」

チビサンタの報告に、仕事が完了して少しは上機嫌になった教官サンタの眉間に再び皺が戻る。

「偵察にあるまじき失態だ。まもなく米軍主力が来るというのに……やむをえん、俺達で避難させるしかあるまい。場所は？」

「サー、我々が一番近いようです。五分もあれば走って行けます」

「ならば俺と貴様で行く。他の者は合流地点に急がせろ」

まもなく米軍の攻撃が始まろうとしている中、二人のサンタは街路を疾走する。本来のサンタクロースの仕事からは逸脱した行動だが、この国で死者を出すのは夢見が悪い。ただその思いで、彼らは今夜最後の仕事をこなそうとしていた

※※

「首領、ブツは全て工場内に運び込みました。あとは米軍主力が首都を制圧にかかったタイミングで運び出します」

A国の民族衣装に身を包んだ男が、男とは対象的に立派なスーツで身を固めた初老の男に報告をする。サングラスをかけたその男は、葉巻に火をつけながら耳を傾けていた。

「首領、弾薬も多数あるので火はちよつと……」

そう言いかけた男を、首領はサングラス越しでもわかる強烈な眼光で威圧する。たちまち報告をしていた男は委縮し、何も言えなくなってしまう。

「俺が吸いたいときに吸うんだ。口を出すんじゃない」  
彼らこそ、A国内で様々なテロリスト相手に武器等の密売を行っているグループだった。米軍の奇襲とも呼べる攻撃で、国外脱出こそ叶わなかったものの、組織の力を総動員してA国中に散らばっていた販売用物資類を回収することに成功した。あとは、先ほど男が言っていたように米軍が首都制圧に気を取られている間に脱出するだけであり、その脱出の算段も大方整っ

てはいた。

「まったく、アメリカ人のやることは腹が立つ。あいつらこそ世界一の武器輸出大国だつていうのに、個人で同じビジネスを始めようとすればこのごまだ。勝手に、怒る気力も削がれてしまう」

大げさなジェスチャーを交えて嘆息してみせる首領の顔は、どこか楽しげでさえあった。A国での商売がダメになったら他の国で、その国がダメになったら他の国でという風に彼らは各地を転々としては武器密売の規模を拡大させていったのだ。

「二日もすればアメリカ人どもは、税金を無駄に使ったことに気づくだろう。CNNニュースが楽しみだ」  
ガツハツハと豪快に笑う首領の横で、委縮しっぱなしだった男がそろそろという風に右手を上げた。

「なんだ、今俺は最高に気分がいいんだ。内容によってはぶっ殺すぞ」

男は涙目になりながら、携帯電話を耳にあてたまま話始めた。

「その……見張りからの連絡で、怪しい男二人が工場

に入り込もうとしてるって連絡が先ほど……」

「そういうことはなげもつと早く言わん！」

ヒイと情けない声をあげて思わず一歩後退した男から携帯電話を奪い取ると、苛立ちを隠せない声でまくしたてた。

「アメリカ人の特殊部隊かもしれん。ここが報告される前に殺せ！」

※※

一方的に撃たれるというのは、こういう気分なのか。

そうチビサンタが悟ったのは。工場に入り込もうと門に手を掛けた瞬間だった。なんの警告も無しに、工場内部から突然銃撃されたのだ。慌てて教官サンタが物陰にチビサンタを引っ張り込んだが、すでにチビサンタは銃弾を一発右大腿部にもらっていた。

「いてええよお……ファ○○○されるってこんな気分なのか畜生……」

幸い急所は外れていたものの、悠長にできる状況で



はなかった。教官サンタが懸命に止血しようとするも、なかなか血は止まる気配を見せない。

「ケツは貫通してないから安心しろチビ！ すぐにここを離れるぞ！」

しかし、教官サンタの脳裏に一抹の不安がよぎる。もしも動脈が傷ついていたら、チビサンタはもって一時間というところだろう。すぐにソリと合流したところで、サンタの里まではどんなに急いでも二時間はかかる。到底間に合わない。

「教官……」

訓練時などとは明らかに違う、かぼそいチビの声に教官サンタは耳を彼の口に近づけた。

「工場内の人達を……逃がしてやらないと……きっと驚かせちゃっただけです………米軍が来る前に、早く……」

それだけ言って、チビサンタは意識を失った。すぐに教官サンタが確認するが、幸い脈や呼吸はある。すぐに死ぬことはない。

簡単な応急処置を行いながら、傷口を確認した教官

サンタは確信した。

フルタタルシヤケツ  
「完全被甲弾……」

チビサンタを狙った弾は、一般的に軍隊で使用される弾丸に間違いなかった。住民が自衛のために狩猟用ライフルを持ち出したのはわけが違う。明確な殺意をもって、チビサンタは撃たれたのだ。

ふつふつと、教官サンタ自身も気づかぬ間に己の中で燃え上がる感情があった。なぜこいつが撃たれなげやならん。訓練を進めていく中で、サンタクロースとしての責務を果たすために、こいつは変わった。こいつは、次世代のサンタクロースを担う人材に違いない。そんなやつが、こんな国で。

教官サンタは無言で己のもつ自動小銃のボルトを引く。感情の矛先は、工場内にいるであろう人間へと向けられた。

※※

チビサンタが目を覚ました時、体にあたっていた感

触は冷たい地面のものではなかった。何かとても温かくて大きいものが目の前にあるような、そんな感触だった。

「おお、目を覚ましたか？」

ひどく懐かしい声だ、と思った次の瞬間にチビサンの記憶と合致する声だと思い出した。

「きよ、教官どの？」

チビサンは自身が教官サンタに背負われていることによくやく気がついた。相変わらず撃たれた場所は痛むが、体が痛みに麻痺してきたのか先ほどより痛みは緩和したように感じる。

「あと少しで合流地点だ。俺の背中であんまりくしてろ、チビ」

「そんな、教官どのに迷惑をかけるわけには……自分を置いて逃げないと、米軍が」

「俺の目の黒いうちは誰一人置き去りにせん！ ソリから最初にこの国に降り立つのが俺で、最後にソリに乗り込み帰るのもまた俺だ。俺の信条を貴様ごときが踏みにじれると思うな……幸運にもソリに行けば救急

キットがある。助かるぞ」

「しかし、私の血が服に……」

「サンタの服がなぜ赤いか教えてやろう。出血した際に血を目立たなくするためだ」

「工場は、どうなりました？」

一瞬の沈黙を置いてから、教官サンタは言葉を続けた。

「撃ってきたのは野犬かなにかだと勘違いした住民だった。説明したら、素直に応じて避難した。貴様の負傷し損だな」

チビサンは一瞬で嘘だと見抜いた。教官サンタの腰にあったはずの予備弾倉が三本減っていたからだ。よく嗅いでみれば、血の匂いの他にサンタ服に硝煙の臭いが染み付いている。

「先ほど米軍主力が町に入ってきたようだが、今のところ銃声は聞こえてこん。俺達の仕事は終わりだ。貴様はゆっくり休め」

見れば、もう二人の目の前には飛び立つのを今か今かと待ち受けるソリが現れていた。安堵感が襲ってくる

ると同時に、心地よい眠気に誘われた。だが、まだ意識を失うわけにはいかない。最後に、一つだけ。

「教官、自分は立派なサンタクロースでしたか……?」

先ほどと同じように沈黙が一瞬あったが、帰ってきた教官サンタの口調は柔らかだった。

「貴様は米兵を八人仕留め、部隊に貢献した。貴様は間違いなく立派なサンタクロースだ。誇りに思え」

二度と聞くことはできないであろう賞賛の言葉を噛みしめながら、今度こそチビサンタはそのまま背中の上で意識が遠くなるのに任せた。

※※

サンタクロースの仕事は、クリスマス終了と同時に終わるわけではない。クリスマス終了後も、サンタの里にいる各々のサンタクロースは後片付けや報告書、今年分の決算処理で忙殺されていた。

そんな様子を、長老サンタは側近のメガネサンタの報告を受けつつ満足そうに長老室の窓から見ていた。

「今年の山も無事に超えたか。全世界の子ども達が笑顔で溢れる、素晴らしい日になったな」

「懸念していたA国でも、十分な成果をあげました。

我々の一人が負傷したものの、A国内での死者ゼロでプレゼント配達完了。これ以上ないほどの結果です」

クリスマス翌日のCNNでは、死者ゼロで終わった今回の米軍侵攻について大々的に取り上げられていた。米軍の進撃は滞りなく進み、すでに住民の避難が完了していた町の廃工場で目的の武器密売グループを全員捕縛に成功。軍民ともに死者ゼロで、これ以上ない米軍の快勝だと全面的に報じられた。

だが、長老の机にある報告書に書かれている内容とそれは一部異なる。実際には、米軍主力が首都郊外の町に侵入した際、街の一角で激しい戦闘を確認。もしや行方不明になった部隊かとそこに急行すると、廃工場でなぜか武器密売グループが全員大きないびきをあげて倒れていたというものだった。その場に残された薬きょうの数から、激しい戦闘が行われた模様だが武器密売グループが何と戦っていたのは依然不明。

「尋問によると、やつら赤い化け物が襲ってきたと供述しているようです。ちなみに、現地で発見された米兵も同様にです。米軍上層部ではサンタクロースの介入を疑っているようですが、有耶無耶に処理される公算が高いかと」

「我々是我々の仕事をこなし、アメリカは目的を達した。双方丸く収まったんだ。いいことではないか」

メガネサンタは若干いぶかしむような眼を長老に向けるが、思ったことをそのまま口に出すような趣味は持ち合わせていなかった。

なぜ武器密売グループが潜伏するであろう町にサンタクロースを向かわせたのか、なぜ米軍はサンタクロースが待ち構える町へまっすぐやってきたのか。どうも大きな力を感じずにはいられない偶然が重なっているようにも思えたのだ。

そんなメガネサンタの視線に気づいたのか気付かないのか、長老サンタは目を細める。

「我々は人間であることをやめサンタクロースになったのだ。このぐらいでなければ……ともあれ、特

に彼らはよくやってくれた」

長老サンタの眼前では、今回一番の功労者であるアフリカ支部のサンタクロース達が、各々今回使用した銃器類の整備を行っているところだった。

「私も、クリスマス後の残務処理を頑張らんな。しかしその前に……」

長老とメガネの眼下では、アフリカ支部のサンタクロース達が相変わらずぎらついた目でやることをやっていた。

「ああ、オイルを塗った君の体はとってもキュートだよ、ナタリー」

「すぐに中も外もきれいにしてやるぞ、ポーラ」

「ここでスライドを……はめる！　くう、やっぱリセクシーだねリサ。舐めまわしたいくらいだ」

各々の銃を全力で愛でながら、彼らの目はここではないどこかを見ているようだった。

「彼らをサンタクロースに戻さんといかんな」

月刊缶じょうすクリスマス特集号 通巻194号

2013年 12月2日発行

編集人 芹沢一 千夜時雨 張子

印刷所 広島大学文団BOX